

『グローバル天理』第4号（通巻16号）掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言 「クローン人間と天理教」

クローン人間は、子供のできない夫婦の心理的要望にこたえて作られる人道的営みであるという理由を推進派は論拠としているが、自己の世俗的欲望を満たすという点では、商業的な自己利益を満たすための羊や牛のクローン製造と理屈は同じだ。生命の尊厳をうたう宗教が、神の領域に迫る今日の科学技術とどう折り合いをつけるかは、教義の根幹に関わる重大な問題だ。「ぢば」という場における生命の創造を中心教義とする天理教においても、遺伝子操作やES細胞による再生医療について緊急に討議されなければならない。

荒川善廣 「「元の理」の探究（1）—「元の理」の探究 [1]」

本稿では、「元の理」を解釈するさいの方法について検討している。まず、科学が研究の対象としているのは現象である。現象は本来感覚で知覚できるものであり、すべて過去の出来事を意味している。しかし、「元の理」で語られている事は、単なる現象でもなければ、過去の出来事でもない。むしろ、現象が成立するための根拠や、時間を超える永遠性について、象徴的に物語られている。このような論題を考察するのは哲学であり、とりわけ形而上学である。存在の根拠だけでなく、世界、魂、神といった特殊な論題を検討するのも形而上学の使命である。

北詰洋一 「紛争回避のテクノロジー（1）—故郷を捨てながら「難民」と呼ばれない人々（IDP）」

現代の世界では、国際紛争が起こるとほぼ自動的に、関係のない人々がそれに巻き込まれるのをおそれて国外に逃げ出す。いわゆる「難民」である。その人たちを助けるための国連機関が難民高等弁務官事務所（UNHCR）がある。「難民」には政治難民、経済難民、政治亡命者など性格によって別の名前と呼ばれている。だがそれとは別に、何らかの事情で住まいを捨てても国境を越えられず、厳密に「難民」と認定されないままなかば放棄されている気の毒な人たちがいる。その人たちに焦点を当ててみた。この連載では、政治に限らず、様々な争いごとを取り上げて、それを回避する手だてがないか考えてみたい。

末延岑生 「ことばと教育（1）—ことばの元を探る [1]」

人間は進化の中で動物的本能を失って行ったが、それに代わるものとしてことばを身につけた。人類はこのすばらしい宝物を、いったいどのようにして所有するに至ったのか。その起源を考える。言語学の周辺諸科学は、この四半世紀の間、言語の由来を目覚しいばかりに浮き彫りにしてきた。今回はことばの起源に接近するための14項目にわたる仕方を簡単に紹介した。

宮田 元 「宗教・スポーツ・教育（1）—スポーツと宗教」

スポーツの定義は宗教の定義と同じように難しい。スポーツは、語源的には、英語の *disport* に由来しており、日常から離脱して非日常の世界へ移動すること、すなわち、遊び、戯れ、慰み、息抜きなどが本来の意味をもつものと考えられる。スポーツの範囲は非常に幅広く、癒しや、瞑想を中心とするヨーガや坐禅なども含むとする。ここに、宗教とスポーツがいかに密接にかかわっているかが分かる。競技者が体験する絶頂経験は、宗教的体験ともいわれるもので、この特徴から、宗教という究極的実在の経験とみることができる。

太田登・中井精一 「天理教原典とやまとことば（16） 方言資料と比較研究：『奈良県風俗誌』 [5]」

「奈良県風俗誌」のなかから、教祖が言語形成期を過ごされた天理市南部の朝和村に関する記載事項のうちこれまでの紹介で残った15・16・18・19を紹介する。とともに、この資料の解題として「調査項目の選定とその関係資料」「調査の方法及びその経過」について解説をおこなった。

笹田勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—（14） 第二章「悟ること」について [14]」

仏教が分かるには、「二つでなくて一つであり、又一つであつてそのまま二つである」という「般若的空思想」（般若即非の論理）の具体的発展である「華嚴哲学」を知ることが必要であると、大拙氏は言っている。

堀内みどり 「天理異文化伝道（15）天理教のコンゴ伝道 [14] —初代会長時代〈1963—1967〉 [7]」

コンゴ政府から、中山善衛たすけ委員長の査証は出ないといわれていたが、委員長一行は無事にコンゴ入国。委員長のことばに励まされて、普請中断の中、おたすけとおつとめに励む。本部から普請再開に勤めよとの言葉を受けて、普請再開を決定。当局からは何の文句も出ず、む

しろ早く取りかかるようにと説諭される。昭和 41 年教祖 80 年祭にコンゴより 10 名帰参。教会設立のお許しを得、同年 11 月 12 日、神殿は落成する。

佐藤浩司 「天理教東南アジア伝道誌（9）戦前のフィリピン伝道〔7〕」

第 2 次世界大戦前、南方方面に在留していた日本人は、約 4 万人といわれている。そのうち、約 2 万 7 千 名がフィリピンで、中でもダバオに約 2 万名が在住していた。これは、ダバオにおける日本人の開拓、特にマニラ麻の栽培が成功し、定住が可能になったからである。このダバオで、本宮寛、塚本義輝の二人の伝道者が活躍した。

佐藤孝則 「生命論としてのエコロジー（2）「クローン人間計画」の光と陰〔2〕」

1978 年に映画「ブラジルから来た少年」が初めて劇場公開された。また、1980 年には手塚治虫の漫画『火の鳥・生命編』が発表された。この二作品とも、クローン人間を扱ったフィクションの話である。ところが、今日では人間のクローニングは一層現実味を帯びてきている。しかし、クローン研究を含む科学の急速な進展とは反対に、倫理面の研究が後手に回っている。科学の研究速度に対する社会の成果受容速度のギャップが、今日大きな歪みとなって表面化しているように思う。そのギャップを埋める作業こそ、いま求められている論議ではないだろうか。

小滝 透「天理比較神秘論への試み(16)イスラーム神秘主義—その(1)」

今回は初期イスラーム神秘主義（スーフィズム）の状況について述べてみた。スーフィズムがアラブ・イスラーム帝国のすさまじい富の集積に背を向けて成長してゆく様子を、である。今回は、そのスーフィズムが到達した風景と、自らが組織した神秘主義教団（タリーカ）の在り方を描写することにした。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（16）ギリヤーク尼ヶ崎さんの踊り」

ちょうど一年前の 4 月 1、2 日、大阪にある国立民族学博物館で、ギリヤーク尼ヶ崎さんが踊った。かれは、60 年代後半以来一貫して路傍や公園で踊り続けてきた「大道芸」の達人として知られている。三方から観客が取り囲む円形の舞台にショッピングカートを引いて登場すると、おもむろに道具を広げ、衣裳を整えて化粧をはじめ。カセットテープのスイッチを入れ、かすれた音が古いスピーカーから鳴り出すと、踊りがはじまった。毎日練習は欠かせないとい

うギリヤークさんのからだは、さすがにしゃきっとしている。しかし、老いもまた明らかで、静止すると左手が震える。しかしその震えさえ、若い者にはできない独特の印象を観る者に与える。三味線の音が高まると、動きも次第に高揚してくる。蹲り、跳びあがり、からだを投げ出し、地面を打つ。ひたすら南無阿弥陀仏を叫びながら、転げまわり、突然駆け出し、バケツの水を浴び……。こう書くといかにも八方破れであるようである、目の前に展開する光景は決してヒステリックではない。動き自体相当激しいのに、しかしなお、押し付けがましい怒りや悲嘆といった生の感情ではなく、穏やかさとやさしさが、かれの全体から受ける印象の基調だった。

金子珠理 「ジェンダー女性学情報（15） ケアの倫理 [5]

ケアの倫理から派生する現代正義論とフェミニズムとのかかわりについて述べる。ジェンダー化された家族内の正義を問わないジョン・ロールズ(John Rawls)の「正義論」の再解釈を紹介する。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信(15) イスラム教と臓器移植[4]

イスラム教の教義にのっとった医療倫理を確立しそうしたことの実行できるイスラム教の医者や一般の倫理委員会に入れようとしている。見上げたものである。最近のニュースから臓器移植の話題を拾った。

上杉武夫『都市の再生に向けて—アメリカ通信（15）カリフォルニアの電力事情』

カリフォルニアの電力不足騒動は、ハイテクと長期の好景気を享受した人々にとって信じられないできごとであった。一見それは州政府の電力とエネルギー備蓄政策の失敗が原因のように見えるが、州政府は解決策を打ち出せずエネルギー対策は暗礁に乗り上げた感がある。しかし、今日の電力不足解決は消費者の手にもゆだねられている。カリフォルニアの途方もないエネルギー消費量を変えるものは、一人一人の慎みの生活にある。

特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る」（5）

金子 昭「人間学としてのスポーツ [2]」

スポーツは人間の営みとしての身体文化である。スポーツに関わる倫理学の分野には、教育倫理、生命倫理、環境倫理、経営倫理等がある。これらの倫理学分野は、身体文化のテーマと

して追求されるべきものである。本稿ではまた、天理という超越的起源に照らされた人間の学的探究としての天理人間学 **Tenri Human Studies** の一環として、陽気ぐらし文化をめざす天理スポーツ論の素描を行った。